

彼の迫害は律法熱心の証あかしであり、律法熱心が彼をして迫害へと駆り立たせた。先に述べたステパノへの迫害も彼にとつては律法否定の罪に対する天誅てんちゆう的行為であつた。

×

×

パウロのユダヤ教時代のキリスト教徒に対する迫害の記事を讀むとき、まさにそこに熱狂的律法主義者としてのパウロを見る。律法主義については、先に幾度も述べてきたので繰り返して述べないが、要するに神の命たまきの滾り、即ち、自分の存在の根源、または自分の生の根柢そのものの表現言語としての律法を知らないまま、ただ律法の文字にだけ目を向け、その文字を絶対化し、それを自分の生き方の唯一の規範とし、自分自身を統制し統一化してしまふ在り方が律法主義的生である。そして、その在り方を徹底遵守するとき熱狂が生ずる。熱狂は、人として当然在るべき社会への適応が欠落し、消極的に拒否するか、積極的な否定的行為を生み出す。つまりその行動は非社会的であつたり反社会的であつたりする。

彼は後年、キリストに於いて、命の滾りたまきに開眼したとき熱狂的律法主義について、「文字（律法）は人を殺す」「石に刻まれた文字（律法）に基づいて死に仕える務め」などと律法主義が持つている問題を強烈な言葉で体験的反省として語っている。（コリントの信徒への手紙二、三章）

六 律法主義の問題点

熱狂的律法主義がもつ最大の問題は、先にも言ったとおり、自己の存在を、それとして在らしめている根源の命の滾りに開眼しないままで、現れた形—律法（聖書）の場合はその文字—を自己の存在の拠り所、または根拠として、それを絶対（神）として統一されることである。言いかえるなら、自我が生み出したものを、自分にとって直接の絶対的權威、即ち神としてしまうことである。この一点は、どれほど声を大にして語っても決して語りすぎではないほどに肝要な事柄であることは、何度も語つて来た。なぜなら、それがどれほど敬虔で誠実そうな努力に見えようとも、結局それは、より強固な自分作りをしようとする自我意識にささえられた行為だからである。別な言い方をすれば、そこでの関心は、ひたすら自分自身に向けられており、どうすれば自分の価値が高められるか、善良な自分になることが出来るかという自我意識の働きの世界にはかからない。だからこそ、先に律法主義者は自我を起点とし、成るべき自我を実現させようとする利己主義者であると言つたのである。しかし、当の彼自身はそのような自分であることには全く気づいていない。

×

×

以上のように、律法主義の在り方が持っている問題性は、自我意識による自我自身への関心で

終始しており、そこに於いて、「他者」や「神」に対して、どれほど愛や敬虔か叫ばれ（行為されようとも、所詮は、自我実現の手段であり、自我意識内での働きにすぎない。だからパウロは「あらゆる神秘と知識に通じていようとも、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ（自我意識から出たものであれば）無に等しい。全財産を貧しい人人のために使いくれくそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ（自我意識から出たものであれば）わたしに何の益もない」というのである。（コリント信徒への手紙一 十三章）

×

×

このような自我意識に支配された思いを、パウロは「肉の思い」と呼び、そのような生き方を「肉に従って生きる」と言い、さらに、そのような生き方をする人のことを「肉に在る人」「肉の人」といった。そして、この肉の思いに支配されて生きる人の在り方は、根源としての命の滾りに生かされている自己自身の、有り難き生の現実から脱落、即ち創造に於ける人間の自然から脱落させている意味に於いて、パウロは「肉の思いは死である」「肉の思いは神に敵する」と言った。（ローマの信徒への手紙八章六節）

×

×

パウロの意識の在り方の反省は、パウロだけの問題でなく、広く人間一般の根源的な在り方についての問題提起となる。即ち、自分が望ましく思う客観的な自分の在り方を自分で作り、その

ような自分自身になろうと努力すること。又は、自分が自分自身に求める客観的な基準や規範を、自分の外の何か―例えば宗教教典の言葉―に見出し、それに共感して、自分や他者、世間が「善し」とする自分自身であろうと努力すること。それらは一見誠実で敬虔そうな姿であっても、その実、自我意識の働きによるものであるという事実には鋭く眼を向けなければならぬ。

この一点は、どれほど問いつづけても、決して十分とは言えない自我意識の持つ恐ろしい落とし穴なのである。くだいようだがさらにもう一度言うならば、人が、自分自身の「罪」について、どれほど深く認識し、嘆き、悔い改め、神の愛に自分を委ね、救われたと信じようとも、それらの信仰が自我意識の働きの枠の内の事柄であるという、恐ろしい落とし穴の内の事ではあるまいか、ということ自分を問いつづけなければならぬし、そのように「問いつづける作業」が、実はまぎれもなく自我意識の作業それ自体であることに気づくことが必要なのである。このような自我意識の働きを、パウロは「肉の思い」と言ったのであるが、イエスが当時の宗教家達の在り方を「偽善者」と言われたも同じ洞察によるものである。又、聖書が「罪」というときも自我意識による働きの様態を指しているのである。

では、どのようにしてパウロは、この「肉の思い」の問題性に気づき、そこから脱出したのだろうか。

×

×

彼は所謂「反省」することによって、肉の思いの世界から脱出したのではない。「反省」とは、それがどれほど知的な敬虔であれ、感情的な深い悔い改めであれ、又、強い意志に基づく決断であつても、未だ尚、それらは「自我意識」の働きの一部にしかな過ぎない。所詮は「肉の思い」なのである。

七。パウロの回心

パリサイ宗に属する熱烈な律法主義的ユダヤ教徒として、徹底的に迫害していたキリスト教にパウロは回心した。「回心」という言葉の意味は、旧約聖書や新約聖書に於いては、「向きを変える」という意が元来あるそうだが、いわば生き方の方向転換ということであつて、パウロならずとも、誰にとつても大變な出来事である。

×

×

私たちが、信仰の人について関心を向ける点の一つに、その人が、「何時、どのようにして、そのような生き方をするようになったか」ということである。しかし、大抵の場合、回心の前後の事柄はよく語り説明が出来ても、出来事としての回心の中心的事には、当人にとつても、十分な説明が出来ないことが多い。ましてや、それを知りたいと願う者にとつて、なかなか理解

出来ない。「気がついたら、そのような生き方をしていたのです」などと、聞かされることがある。

とはいえ、全く理解出来ない事柄ではない。又説明出来ない事柄でもない。

×

×

パウロの場合も、聖書によると突然に回心が彼の身の上に、出来事として生じたように記されている。

さてサウロ（サウロはラテン名であり、パウロはユダヤ名）はなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムへ連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天から光りが彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うのと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ、そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えずに立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連

れて行った。パウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。（使徒言行録九章一節〜九節）

これは、一般にパウロが、復活のキリストの顕現に接した記事として、同じ「言行録」二二章三節以下及び二六章一二節以下の記事とともに取り上げられる部分であるが、この「使徒言行録」は紀元八〇年から百年ごろルカによって書かれたものであり、パウロ自身はその手紙に於いては、これほど詳しく記してはおらず、彼は「わたしにも現された」（コリント信徒への手紙二十五章八節）とか「み子をわたしのうちに啓示された」（ガラテヤの信徒への手紙一章十六節）とだけ記している。そのようなことから、聖書学者の間では、使徒言行録にある顕現記事について問題を感じる者があるようだ。

×

×

このような不思議に思われる事柄に関わるとき、その「出来事」だけにとらわれて論議すると、真に問わねばならない事柄から逸脱してしまう。つまり、「本当にイエスがパウロに現れたのか」「パウロが見たイエスは幻想ではなかったのか」「ルカがそのようにパウロのことを創作したのではないか」などの空しい論議となる。

「現れたか、否か」「見たか、見ないか」「本当に起こったのか、否か」というような論議ほ

ど、無意味で危険なことではない。

その理由は、「見た」とか「現れた」とかいう事柄自体を、自分の信仰の拠り所、又は生き方の根拠にすると、必ずその人の信仰も生き方も所謂「ややこしいもの」になる。これは、一般にいわれる「御利益信仰」がもつ問題と同じであり、「見たから」信じた。「現れたから」受け入れ、「利益をもたらずから」信仰を持ったということになる。又自分の信仰や生き方の、態度の決定の根拠をそれら「目に見える事柄」におくと、「利益をもたらず」ことがなくなれば、その信仰を放棄することになり、「見たこと」や「現れた」ことが、たんに幻想に過ぎなかつたかつたなら、簡単にそれまでの自分の生き方や人生についての態度決定を放棄したり転換してしまふことになる。

このように、人が、自分が「見たこと」「自分に「現れたこと」「自分に利益をもたらずこと」等見える事柄を根拠として生きるとき、その人は一生の間、安心を得ることなく過ごさねばならない。

だからこそ、イエスはトマスに、「あなたは見たから信じたのか。見ないで信じる人は幸いである」と言われた。(ヨハネによる福音書二十章二九節) このイエスの言葉は深く重たい。

×

×

パウロは「見た」から信じたのではない。私たちの靈魂に衝撃を与え、感動させ、生き方を変

えさせる強烈な宗教的実存を生きたパウロの人格の有り様の根拠は、決して、ただイエスを「見た」からという事によるのではない。もし、「見た」こと、「現された」こと、がパウロの生き方の根拠だったとすれば、人がパウロのように生きる為には、同じような「見る」体験、「現される」体験をしなくてはならないことになる。しかし、パウロのように生き抜いた多くの信仰の先達のすべてが「見た」こと、「現された」ことを生き方の根拠に持つてはいない。

×

×

パウロを回心に導いた出来ごとは何だったのか。使徒言行録にある「三日間目が見えなくなり、何も食わず、飲みもしなかった」という記事は、とても象徴的である。つまり、パウロ自身自分に何が起こったのか理解出来なかったのではなからうか。しかし、気がつくくと、彼は自分の生の根底に、それまでとは違った命の滾りを自覚したのである。その命の滾りの事実を「キリストがわたしの内に生きておられる」（ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節）と知ったのである。それは、自分の一部として生きていくのではない。「生きてい」ということが、もはや「わたしではなく」キリストがわたしを生き、キリストをわたしが生きている、という、わたしの生の全体がキリストの命の営みそのものであるということにパウロは気づくのである。

×

×

—このような変革は、ただ反省して生き方を少し変えたとか、自分の在り方の誤りに気づいたの

で考え方を変えた、というような自我意識内の反省によるものではない。

パウロに起こったことは、それまで、パウロのすべてを支えてきた、彼の自我が根底より崩壊したという事である。さらにその自我に代わって、人が人としてそう在ることが自然であるような、本来的な命の滾りが彼の内に現成してきたということである。その現成してきた命の滾りを彼は「キリスト」と言うのである。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。と言ひ、さらにフィリピ人の信徒への手紙に於いて、次のようにキツパリと言ふ。

わたしにとって、生きることはキリストです。—フィリピの信徒への手紙一章二一節—

×

×

誰でも、自分の内に秘めている大切なことは軽々に語らない。ましてや、その人の生き方や考え方を方向づけ、且つ決定づけている宗教的な「原体験」といえるような事柄については、なおさら寡黙かむくになる。それは、自分の存在の原動力となり、生き方を刻々決定づける根源的な働きとしての「事」なので、軽々に言語化出来ず、従って語りたくても語り得ないのである。

しかし、そのような人の言動を注意深く見つめていると、彼が語らなくても、彼の内深くに在って、彼の言動を促しているそれを感じとることが出来る。

それはパウロに於いても同じである。

×
×
コリントの信徒への手紙で、パウロは、不思議な体験を語っている。

わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っています。その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはこのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。彼は樂園パラダイスにまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表し得ない言葉を耳にしたのです。このような人のことをわたしは誇ります。しかし自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇るつもりになったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。(コリント信徒への手紙二 一 二章一節以下)

×

×

わたしたちは、このパウロの語りを注意深く聞かねばなりません。彼は、不思議な体験者のことを語っているが、その体験者とはパウロ自身のものである。にもかかわらず、体験者を他人事のように「わたしはキリストに結ばれていた一人の人を知っています」と言う。なぜそのような語り方をしたのだろうか。このことを見つめていくと、パウロの信仰の根っこのところが見えてくる。

X

X

パウロは「わたし」という自分と、「キリストに結ばれている人」である自分とを区別している。しかも、「キリストに結ばれている」自分は、第三の天に引き上げられ神の栄光をそこで見る。しかし一方の「わたし」については、「弱さ以外には誇るつもりはない」と言う。

一体パウロはここで何を言おうとしているのだろうか。先に紹介したパウロの手紙の部分を引き続き読んでみると、彼が、私たちに言いたいことがよく理解できる。端的に言つて、ここでパウロが「わたし」と言っている自分は日常性の自分のことである。「日常性」とは「肉体的性」であると共に「自我^{エゴ}の意識が支配する世界」のことである。自我意識が支配する世界とは、私は私であつて私以外の何者でもない、という私の世界のことである。そこでは、互いの自我意識に共通する論理があり、従つて、その論理に基づいた言語があり、その言語によつて互いに理解し意思の伝達が可能となる。「肉体的性」とは「形」の世界である。形とはそれ自身限定するところ

に成り立つものである故に、形はそれ自身に於いて自己主張を他に対してなす存在である。その意味で「私」とは、そのまま、ことの善し悪しとは別に、他者に対して自己主張をなし、積極的には、他者否定をその存在の中に抱え込んでいるものなのである。所謂「自我」とは、好むと好まざるとに関係無く、そういう有り様をしているものなのである。正に「私」とはそういう自我であり、そういう意識を持った存在なのである。

ヤコブはそのような「私」の姿を次のように示した。

あなたの方の中の戦いや争いは、いったい、どこから起こるのか。それはほかではない。あなたがたの肢体の中で相戦う欲の情からではないか。あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることが出来ない。

人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、誘われるからである。欲がはらんで罪を生み。罪が熟して死を生み出す。(ヤコブの手紙)

勿論パウロ自身もそのような「私」を「弱さ以外に誇るつもりはありません」と先に言っているが、ローマの信徒への手紙に於いて、「私」の姿を次のように告白している。

わたしは自分のしていることが、分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。……そういうことを行っているのは、もはや、わたしではなく、わたしの中にすんでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意思はありますが、それを実行出来ないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしてるのは、わたしではなくわたしの内に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしていることが分かります。わたしは、なんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。(ローマの信徒への手紙七章十五節以下)

×

×

パウロにとって「善を行うことが出来ない」ことが問題なのではなく、善を行うことが出来ない「存在自体」が問題なのである。この点についてはしっかりと抑えておかないとパウロの信仰を正しく理解できない。

善を行うことが出来るか、出来ないかということは、道德や倫理の次元のことである。パウロ

が問題にしていることは、善を行うことが出来ない自分の存在それ自体についてである。いうならば、それは、倫理的な問題でなく存在論的な問題なのである。倫理的な問題とは「私はどのように生きるべきか」「私はどのように在るべきか」ということであるが、存在論的な問題とは「私の存在の根底は何か」「私を私とし支えているものは何か」ということだと一般的にいえる。したがって、「罪」ということも、「善を行わない」ことではなく、「善が出来ない自分という存在そのもの」のことであって、そのような存在の姿こそ「自我」に支配された「私自身」、つまり、「自我意識に立つ私自身」なのである。

自我とは「私は私であって、私以外の何者でもない」という「私」のことである、と先に言ったが、そのような「私」の在り様は、自分をそのままの姿で全く肯定した在り様だといえる。全き自己肯定的存在こそ「自我（エゴ）」の正体なのである。そして「律法主義」とは、そのような自我意識の上に成り立つ誠実だといえる。だからこそ、その誠実さがどれほど、謙虚で愛に満ち、正義に対して熱心であつてもそれは所詮、自我意識から生まれた鬼子にしかすぎない。そのような在り方を、イエスキリが「偽善」と申されたことは、すでに語つて来たとおりでである。とにかく、自我意識の働きは、ひたすら自分自身だけに自分の思いを向けること、であると言えよう。たとえその思いが、どれほど愛に溢れ、善に熱心であり、ありつたけの誠実さで神や仏に向かつていたとしても、それは、所詮は自我意識の鬼子でしかすぎない。このことをパウロはコリ

ントの信徒への手紙二 十三章に於いて、厳しく指摘している。

×

×

わたしはあなたがたに最高の道を教えます。……たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識とに通じていようとも、山を動かすほどの完全な信仰を持つていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

愛は決して滅びない。預言は^{すえ}廃れ、異言はやみ、知識は^{すえ}廃れよう。私たちの知識は一部分、預言も一部分だから、完全なものが来たときには、部分的なものは^{すえ}廃れよう。幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは今是一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。——コリントの信徒への手紙一 十三章——

この箇所は、パウロの「愛の讃歌」として多くの人が知るところであるが、これを、私たちの在るべき生き方としての倫理として受け取るなら、おおよそパウロの言わんとするところから逸脱する。ましてや、「愛」の解説として、認識論的に受け取ることも誤りである。

たしかに彼は、私たちの在り方、生き方を説いている。その限りに於いてパウロは「倫理」を説いたといえよう。しかしその場合、彼はただ、人間の在り方、生き方としての倫理を直接に提示したのでなく、倫理を倫理として生み出すところの所請「倫理的基盤」を、しっかりと問い、しかもそれを自分の命として挿み得た故に、自分とは何か、自分の存在の根柢とは何か、という存在論的問いを、認識レベルで問うたのでなく、その問いと答えとを自分の身にしっかりと得、それをふまえた上で、存在の在り方、つまり人間の生き方を示したのである。

これらのことを、パウロに於いて具体的に言うならば、彼はかつて自分の生き方を「律法」に求め、律法の教えを守ることが人間の最も正しい在り方と信じていた。そして、その「律法的な生き方の基盤」は、何処にあったのかと言うと、律法を神のご意思の只一つの表れ、即ち律法即神とするユダヤ教の信仰に基づいていた、このことは既に述べてきたとおりである。

だが、パウロは、そのような自分の在り方に、理屈ではなく、主体的、実存的に問題を覚えるようになる。それは、自己の根底に深く自己矛盾を意識したことである。この事についても先に述べたが、今一度、パウロの告白を聞いておこう。

善をなそうという意志はありますが、それを実行出来ない。……わたしは自分が望む善は行わず、望まない悪を行っている。……善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっている法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて、心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしていることが分かります。わたしは、なんと惨めな人間なのでしよう。死に定められたこの体から、誰がわたしを救ってくれるでしょうか。(ローマの信徒への手紙七章十五節以下)

このようなパウロの自己矛盾の意識は、いったい何処から生じて来たのだろうか、と厳密に問うことはパウロを正しく知るため、また、私たちが真に自己自身になるため、即ち、「神」を見出すためにはとても重要なことなのである。この視点は、私が「パウロの信仰を問う」場合の基本的な問題意識なのである。

彼が、自己の根底に深く自己矛盾を意識したことは、たんなる心理学的な内省からではない。超自我という無意識の理屈を持ち出して、自我の醜さをまくし立て、責めたてて、「あなたは罪深い者である」と脅迫し、良心の呵責を逆手にとつて、「それ、十字架のキリストはあなたを赦してください」と感情的に迫り、「救われたような気分にしてしまう」ような、何処かで行われているような事ではない。

人はすべて「罪人だ」という教義が先ず認識論的であり。それを聖書原理として、確信し、そうあることを信仰だと思ひ込む、それを福音と称して金科玉条に同言反復する信念のことではない。勿論、哲學的倫理的な深い自己反省から生じたものでもない。それらのことは、すべてそれぞれに深淺はあつても、所謂自我意識から出てきた事なのである。しかしパウロのそれは決して自我意識から出て来たものではない。それどころか、パウロ自身が問題としたことは、自我意識そのものだったのである。パウロの先の言葉で言えば「五体の内にある罪の法則」と表現した、意識の働きである。

×

×

熱心なパリサイ宗としてユダヤ教の律法主義に生きていたパウロは、律法を即神の意志として、そこを自分存在の窮極の基盤として生きていた。つまり、律法という「文字」を神の言葉そのものとして、自分を縛っていたのである。（このような聖書主義に立つ人たちは今日でも多く見受

けるような気がする)

言うまでもなく、文字即ち言語は、思考の構造的指標である。にも拘わらず、そこでの思考の構造の根源と根拠とを問わないままに、直接的、機械的に言語そのもの、文字そのものを神格化してしまうことは、正に偶像化現象の最たるものであるといえる。このような意識の作業を問題なく遂行させるものこそ、自我意識なのである。

後年パウロはこのような自己の在り方に気づかされたとき、彼は「文字は人を殺す」と告白した。(コリントの信徒への手紙二 三章六節) この時に、彼は律法主義的生を克服するのであるが、それは自我意識に生きる自我からの超克であった。

では何が、彼をして自我意識の生から超克せしめたのか、これを問うことが、正にパウロの信仰を問うということなのである。

×

×

このようなことを踏まえて、冒頭に掲げた「愛」についての彼の提示を聞くなら、説いていることが、自我意識を自己の生の基盤とするとき「一切は空しい」のだと語っていることが見えてくる。手紙に即していうなら、「愛がなければ」とは、自我意識の働きのままであるならば、ということである。このことを、私なりに少し厳密に言うると、人間関係の在り方の内に生じて来る「愛」という倫理的な関係概念が、ただそれだけで、人間の在り様を示しているのではなく、その

倫理的な基盤に、自我を突き抜けた「命の滾り」そのものの躍動つまり、先に彼が、第三の天にまで引き上げられ、見て聞いて触れたその神の命の事実、としか言いようのないその世界―それは、自分を越えていて、自分を自分こらしめている命の働き、それは同時に、彼にとっては復活のキリストそのもの―の働きがあり、そこから愛が現成しているのである。

×

×

だからこそ、「いつまでも残り、最も大いなるものが愛」なのである。また、だからこそ、「全財産を貧しい人のために使い尽くそうとも」「わが身を死に引き渡そうとも」「愛がなければ」つまり、それらが自我意識からでなく、自我を越えた命の滾りから現成したことでなければ、「わたしにはなんの益もない」と言ったのである。パウロはただの倫理をキリストに包んで、飲みやすく説いたのではない。倫理を説くだけでは、人は決して救われることはない。

八 新しいパウロの誕生―律法主義からの開放―

人はだれでも、自分が安心して居れる場所を求めている。自分が本来居るべき所に居るとき、私は私となり安心できる。人生に於ける求道とは、つまるところ、自分が安心して自分であることが出来る場所を求める旅だといえよう。

パウロもそのような求道の人であつた。彼は真摯にその求道の道を歩み、遂に自分自身の居るべき場を見いだした。だからこそ、私たちはパウロに深い関心をよせる。

彼がその求道において見出した自分の居場所を次のように語る。

生きてゐるのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きてゐるのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。(ガラテヤの信徒への手紙二章二十節)

彼は、かつて、自分は自分であつて自分以外の何者でもない、という自我の立場で神と関わり律法と関わり、その関わりに於いて自分を価値ある者に造り上げようと、自分のあらん限りの情熱を傾け努力するそこに、自分が安心して居れる場所を見た。それは他でもなく、自分によって自分自身を立て完成させ、神に義と認められて安心しようとする場である。このような場が所謂「律法主義」的場であることはすでに述べてきた。

ところが、パウロはそのような場が、自分の本来的な居場所でないことに、復活のキリストの顕現に接することによって開眼させられる。パウロが復活のキリストの顕現に接したことについては、既に述べた如く、十字架につけられて亡くなられたイエスが、墓から再び甦つて現れたと

いう現象自体が重要なのではない。そんな事柄に執われて、そこに自分の信仰人としての生き方の根柢を求めている者があるならば、それこそ自我意識の延長線上に生じた幻想に生きている者である。復活したというイエスの現象を後生大事に垣ぎ回っている者は、世俗に埋没して生きている者以上に世俗的な人間である。なぜなら、そのような人は、イエスを埋葬した墓をマグダラのマリヤ達が訪ねた時の思いと、基本的には同じだといえる。天使は彼女達に語った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」(ルカによる福音書二四章五節)

復活のイエスの現象に信仰の依りどころを持つとする人は、まさに「ここにおられる」イエスに縋すがろうとする女たちの姿である。だから天使は「生きておられる方を、死者の中に捜し求めるような愚かをしてはならない」と戒めた。

今日、第三次宗教ブームといわれている。さまざまな宗教が生じ、多くの人がそれらの教団に引きつけられている。しかし、それらが、真に「宗教」と言われ、「信仰」と称される内実に相応しいものであるかは、深く吟味されなければならない。病が癒される。商売が繁盛する。願いが叶えられる。不思議な業が出来る。霊が見える。……などという現象に人々は振り回され、自らもそのような能力を身につけるべく入信？する。しかし、宗教も信仰も目に見える現象自体のそこには無い。目に見える現象の世界は自我意識の世界のことがらであって、そこのみ根柢を

置く宗教や信仰は、所詮は「生きておられる方を、死者の中に捜す」行為であるといえる。そのような宗教や信仰は疑似宗教であり、疑似信仰にしかすぎず、人をますます自我意識に強固に結びつける働きをなすだけである。

パウロはそれ故に言う。

×

×

わたしは今後、だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。(コリントの信徒への手紙二 五章十六節以下)

かつてパウロは目に見える律法に縋すがることで、自分を立て、安心をその場に求めていた。また、イエスの地上的言動を見て善悪を判断して来たが、彼はそのような在り様ようを「肉に従って」と言う。しかし、復活のキリストの顕現に接して「大いなる命の働きの事実

に開眼させられることによつて「肉に従つて」世界を判断する自我意識が、木っ端微塵に打ち砕かれた。だからこそ、彼は「わたしは今後、誰をも、肉に従つて知ろうとはしません」。

肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」と言う。これはパウロの悔い改めの告白である。と同時に、新しいパウロの誕生なのである。

×

×

パウロは今や、自分が本来居るべき場に自分を置いた絶対の安心を、自分に覚えている。帰るべきところに帰ったという平安を自分に覚えている。自分の命がそのまま命出来る喜びを感じている。自我による配慮そのものが、そのまま大いなる命に支えられ包まれている事実を知り、全き自由を覚えている。

彼は、所謂「ユダヤ教」から「キリスト教」に回心したのではない。それは、いまだ自我の世界の出来事にしかすぎない。自我という枠の中で、少しばかりその考えや立場が変化したというような出来事が、彼に起こったのではない。自我の枠の中で、どれほど自分の価値観や生き方が変わったとしても、それは「同じ穴の貉」^{むじな}にしかすぎない。言うなればそれは量的な変化であって決して質の変化ではない。その意味でパウロは所謂「ユダヤ教」から「キリスト教」という「宗教」に移ったのではない。それはあたかも同じ穴の黒い貉^{むじな}が白い貉^{むじな}に変わっただけのことであって、所詮は同じ穴の貉^{むじな}に過ぎない。ここところはよく注意しないと、とんでもない錯誤を犯してしまう。熱心な宗教の人にそのような方を多く見るし、当のご本人がそれと気づいて

おいでにならない場合が大方のように思うのは、わたしの傲慢心ごうまんしんだろうか。

×

×

パウロは、「同じ穴」の中で自分を変えたのではない。彼は「穴」から出てしまったのである。しかも以前よりも良いと思われる「別な穴」を見つけて、そこを自分の居場所としたのではない。つまり「改宗」したのではない。彼は、どのような「穴」からも開放されたのである。彼は、もはや自分を留め置くべき穴など必要ではないことに開眼させられたのである。だからこそ彼は声を大にして叫ぶのである。

自由を得させるために、キリストは私たちを自由の身にしてください。だから、しっかりしなさい。二度と奴隷のくびきにつながれてはなりません。（ガラテヤの信徒への手紙五章一節）

パウロの口調は厳しく、氣迫に充ちている。

×

×

復活のキリストの顕現に接し、パウロの自我は木っ端微塵に砕け散った。彼を打ち砕いたその大いなる命、命たま滾る世界、即ち復活のキリストは、パウロを新しい命の世界に生きる者へと創造したのである。事実、命の滾りとしてのキリストは、全てを新しく創造せずにはおかない力であ

る。ここに、イエスが「神の国（神の支配）は言葉でなく力である」と言われた秘儀がある。この事実をパウロは次のように語った。

キリストに結ばれる（中にある）人はだれでも、新しく創造されたのです。古いものは過ぎ去った。見よ新しいものが生じた。（コリント信徒への手紙二 五章十七節）

キリストに立つとは、キリスト教信徒になることと同義ではない。キリストに立つとは「其の命」に立つことである。だからこそ、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわが内に生きておられる」と言った。

「神」と称するものを「形」でとらえようとするとき々な「像」となる。観念で理解しようとするといろいろな「文字」や「言葉」となり、「理屈」となる。その結果、表現された「神」の「形」を見ていると、まことに滑稽極まりない「像」となり、「こんな像を神とするとは」と嗤然とさせられるが、当の人にとっては真剣そのもので、それぞれに、「これこそが本当の神であ」と、真面目に信じている。「鯛の頭も信心から」とはよく言ったものだ。鯛の頭も信ずる人にとっては「神」となる。これは、決して他人事として笑ってはならない。人間は多かれ

少かれ同じようなことを生活の中で行っている。

このような滑稽こっけいな事はいつたい、人のどこから生じてくるのだろうか。それは、自分の思い、つまり、自我意識から生じてくる。

自我については、先に幾度も語ってきた。即ち自我とは、自分は自分であって自分以外の何者でもない、と思うこと、又は、自分は自分によって自分である、とする自分のことである。つまり、このような自我は、自分の根拠を自身に置いておられるところにその特徴がある。つまり自分の拠より所は自分だけであり、自分の中心は自分自身なのである。したがって、自我に於いては、生きるということは、自分を少しでも価値ある者にするのであり、自分を楽しませ喜ばせることであって、そのような自分に成ることを阻むすべてを敵と見なし、排除すべき悪としてしまう。このように自我によって生きる者の関心はいつも自分に向けられている。これこそまさに、利己的な生き方以外のなにものでもない。このような自我の意識の有り方を、私は「自我意識」と言ってきた。

×

×

「自我意識」は、いつも自分自身を確認する方向に働き、その作業によって安心しようとする。その確認作業は感覚に於いてなされる。感覚とは言うまでもなく自分以外の外界と自分が具体的に接触する場である。見たり、聞いたり、触れたり、味わったり、感じたり、嗅いだり……とに

かくそれらの感覚を通して自分の外のものと関わるのだが、その関わりに於いて自我が為していることは、対象を確認しているようでありながら、実は自分自身を確認しているのである。例えば、何か美味しい食べ物を味わうときにも、それは、その物を味わっているのではなく、それを味わうという感覚を働かせることによって、自分を楽しませ、自分が楽しんでいるのである。「ああー美味しかった」と言うとき、そこで自分自身の存在を実感するのである。それは自分自身の確認作業であり、自我の安心と満足の作業をしているのである。このように自我は、すべてを自分のためにだけ感覚する。(この場合「偶像」の位置づけは、言葉化されたものの像化かたちかなのである)

×

×

このように自我は自我自身を確認するためには、自我の反映としての対象物が具体的に必要なのである。その場合自我は、すべての対象物を「言葉」に置き換えてしまい、その言葉に於いて、自分を確認しようとする。例えば、「りんご」という言葉に於いて、感覚でとらえた「りんご」の姿形(即ち、色つや、その味、その感触など)が実在する「りんご」だと自我は意識することによって、自分が「りんご」を感覚しているとし、それによって、自分自身を確認し安心させる。このことは「神」というときにも同じである。自我意識の中で神を造形し、その神を「実在する神」だと感覚し、それによって自分を確認し安心する。つまり、自我はすべてを「言葉化」「文字

化」し、その意識の中で「事実」を感覚し、認識したとして、その手応えによって自分自身を確
認し、安心させる当体であるといえる。

X

X

少し表現がややこしくなったかもしれないが、このことをパウロに当てはめて言うならば、す
でに何度も繰り返し返して語ってきた通り、彼は神を律法の文字（言葉）に見て、それを自分に取り
込み遵守することによって、神の前に義人となろうとした。また、その「文字」を自分の頭や腕
に「経札きょうふだ」として付け祈ることにより、義人のしるしとした。その様子は極めて誠実、熱心、
謙虚、義人の姿のようであるが、その実、それはパウロの自我意識から生まれた自分を満足させ、
自分自身の確かさを確認させる作業にほかならない。ここには、神は不在である。在るのは独善
的で利己主義的な自我意識の固まりだけである。これこそ、「律法主義」に潜ひそんでいる恐るべき
落とし穴であることに、パウロはキリストに出会って気づかされた。だから、彼は律法主義的生
を「文字（律法）は人を殺す」と言い、更に「文字（律法）に生きることは死への務めである」
と、律法主義を否定した。（コリントの信徒への手紙二 三章六節）

このように、律法主義的生は利己主義的的自我意識の膨張を促し、ますます人をして独善的且つ
自己満足的な生き方へと誘うのである。パウロはその生き方そのことが人間の「罪」であること
を、キリストの命にふれることによって気づかされた。それはほかでもなく、人間の本来的な在

り方から外れている自分の姿に気づかされたということである。

×

×

この律法主義的生が持つ問題性をもっとも鋭く指摘されたのはイエスである。

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。杯さかずきと皿との外側は清めるが、内側は貧欲と放縦とで満ちている。ものが見えないパリサイ人よ。まず、杯の内側を清めるがよい。そうすれば、外側もきよくなるだろう。

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。そのすることは、すべて人に見せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、また宴会の上座、会堂の上席を好み、広場で挨拶されることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたはわざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいるうとする人はいらせない。(マタイによる福音書二三章)

イエスが指摘なされていることは律法学者やパリサイ人たちが、それと知らないで生きている自我意識による在り方である。彼らは決して世にいう「悪人」ではない。彼らは神殿体制のうちで誠実に儀式を行い、それなりに熱心に求道する律法主義者である。しかし、彼らはその熱心が自我意識から出たものであり、自我意識が秘めている問題性に気づいてはいない。だから、イエスが指摘する言葉がまったく通じない。

後年、パウロはこのような律法主義者について、次のように語る。

わたしは、彼らが熱心に神に仕えていることを証あかししますが、その熱心さは、正しい知識にもとづくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。(ローマの信徒への手紙十章二節)

この場合の「自分の義を求める」ことが、自我意識による熱心ということである。とにかく、問題は利己主義的な自我意識にあり、それを一口で言うとき、「律法主義的生」となる。

×

×

律法主義的生は現代、宗教に於いては言うに及ばず、日常のさまざまな人間の生き方において、顕著に見ることが出来る。そこには救いは無い。あるのは偽善と争い、悲惨と破壊、そして虚し

さだけである。しかし、パウロは律法主義的生の持つ問題性を、復活のキリストの顕現によって開眼され、同時に克服させられた。それ故にパウロを問うことは、現代の私たちの生き方を問うことになる。

九 パウロの「復活のキリスト」顕現体験

人が何かに気づくとか目覚めるとか言う場合、理屈を通してそこに至るよりも、出来事を通しての場合が多い。その意味で、出来事を「経験」「体験」することは、私たちが成長していくためには大切なことである。

体験とは、感覚を通してそのものを肉体化していくことである。本当にそのものを知るとは、そのものを肉体化することである。そして、肉体化された事が精神に深化され、それが言語化され、体系化されることによって、はじめて真の知識、真の思想となる。そのような知識や思想こそ、その人に変革を与え、行為へと促し、平安へ導く力となる。

×

×

少し表現が難しくなったが、ご一緒に考えたいと思うことは、ものごとは理屈からはじまるのではなく体験からはじまり精神に深化され、それが知的に反省されて理屈となり思想となるのだ、

ということである。

この順序を間違つて、私たちは何かを知ろうとするとき、先ず「理屈」から入って行き、「理屈」でそのものを掴もうとする。そして、理屈で理解すること、そのものを「知った」と思い込んでしまう。しかし、その実、その人は、知ろうとしたその事について、ただ言葉で説明的に捕らえただけであつて、自分に肉体化して知つたのではない。理屈で知つた者は、その事について頭では納得出来ても、自分に肉体化したという充足感を持ってない。

×

×

しかし一方、体験により肉体化しても、それを自分の言葉化出来ないでいるなら、その体験は自覚的に自分のものとする事は出来ないし、社会化されない。理屈に拒否反応を起こす人がいるが、「理屈」が悪いのではない。理屈だけで物事を知ろうとし、理屈を操ることで物事を知つたとするその在り方が間違ひなのである。「理屈」は結果である。自分に肉体化された事柄が、自覚の世界で醸造され言語化されたものが「理屈」なのである。この意味で、パウロが「心に信じて義とされ、口に言い表して救われる」と語るのは当を得ている。(ローマの信徒への手紙十章十節)

ちなみに、「神学する」ということは、さしずめ、体験され、肉体化された自分の信仰そのもの(即ち心に信じた事)を言語化し体系化する(即ち口で言い表す)行為であるといえるのでは

ないか。しかし、この場合に於いても言語化され体系化された理屈だけが一人歩きするなら、それは本当の意味で「神学した」ことにはならないだろう。これは「学」一般に於いてよく注意されなくてはならないことだ。

とにかく、「体験」と「理屈」とは共に私たちが、ものごとを真に知ることには於いて大切なことであり、決してどちらか一方にのみ偏つては、そのものを真に知ることは出来ないだろう。

×

×

パウロが復活のキリストの顕現に接したことは、彼の人生にとつて空前絶後の体験であった。その出来事については、新約聖書の使徒言行録九章と一三章に記されてある。

さて、パウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコ地方の会堂あての手紙をもとめた。それは、キリスト信徒を見つけ次第、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、パウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天から光が彼のまわりを照らした。パウロは地に倒れ、「パウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。……同行していた人達は、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。パウロは地面から起き上がって、目を開いたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。(使徒言行録九章一節以下)

復活のキリストの顕現は、彼にとつては晴天の霹靂へきれきであつた。つまり、まったく予期しない「突然」の出来事であり、おそらく、自分に今、何が起こっているのか全く理解出来なかつたに違ひない。同行していた者達も、ただ啞然として「ものも言えずに立ちつくす」のみであつた。そして、パウロが我にかえつたとき、彼の目は見えなくなつていた。この使徒言行録の記事の真偽について疑義をとなえる聖書学者があるが、その当否はともかく、復活のキリストの顕現を通して、「出来事」を「体験」するというのが、パウロによつてどのような意義をもっているかということ、よく知らなくてはならない。

先に、ある出来事を体験するということは、感覚を通してそのものを肉体化することであると
言つたが、パウロは正にこの出来事の体験によつて、一挙にキリストを肉体化したのである。そ
れは、言語や文字を飛び越えた直指人心じきしんの出来事つまり、人の心のもつとも深いところへ直接に
キリストそのもの、命そのものが示され、キリストそのもの、命そのものの「事実」が、瞬時に、
他のどのような事柄にまして「現実的事実」として、パウロ自身のものとなつたのである。

したがつて、パウロ自身の知の世界、つまり言語の世界では説明したり理解したりすることが
出来ず、ただただ、「突然のこと」「立ちつくす」しか他なきことだったのである。その意味で、

彼の「目が見えなくなつて」しまつたことは極めて象徴的である。

×

×

パウロはこの出来事について、次のように的確に語っている。即ち「御子（キリスト）をわたしの中に明らかにしてくださつた」（ガラテヤの信徒への手紙一章一六節）と言ひ、さらに、「生きてゐるのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの中に生きてゐる」（ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節）と言ふ。これは、キリストそのもの即ち神の命そのものが、わたしの生きてゐることその事になつたといふことの自覚である。決して、キリストというお方が、自分の生の向こう側に対象化されており、対象化したキリストの命が、こちら側の私を生かしてゐるといふ意味ではない。だからこそ、彼は「わたしにとつて生きるとはキリストである」と言いきる。（フィリピの信徒への手紙一章二一節）これは、何と率直、明解、的確な表現であることだろうか。言うまでもなく、この意味は「キリストそのものの、即ち神の命の滾りそのものが、わたしの生そのものの全てだ」といふのである。このことを、キリストの肉体化といつたのである。キリストを知ることと言つたのである。

×

×

パウロは復活のキリストの顕現体験によつて、言語を越えて、直接に復活のキリストそのもの、即ち絶対的、且つ根源的、永遠的な命そのものを、自分にいただき、それを自分の生の営みその

こととしたのである。そのことを、今一步ふみ込んでみるならば、パウロを支配していた古い自我に代わって、全く新しいキリストの命が彼を支配するようになったということである。このことをもう一面から見ると、新しいキリストの命に生かされる者になったということである。彼はこの実感を、「キリストにあるなら、全く新しい創造なのです。古い支配は過ぎ去りました。見なさい。新しいものが生じた」と言った。(コリントの信徒への手紙二 六章十七節)

×

×

復活のキリストの顕現体験によって、(肉体化することによって) 知った事実は、彼の「原体験」となって、生き方を押し上げ、導く力となった。

「原体験」が持つ重さについては、先にすこし述べたが、それは、自分の存在の原動力となり、生き方を刻々と決定づけるものでありながら、軽々に言語化できない故に、言語化させようとする願いがその人の生を導くのである。この状態が「求道」であり、それは同時に「求道悦楽」となるのである。

パウロは、この体験により肉体化された「キリストの事実」を真に自己の自覚の世界で頂く端著^{たんちやく}を見出すため、「直ぐに親しい血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上つて、先に使徒として召された人達のもとに行くこともせず、アラビヤに退いた」のである。(ガラテヤの信徒への手紙一章十六節)

ダマスコへの途上で突如復活のキリストの顕現に出会ったパウロは、その体験を、ガラテヤの信徒への手紙に「（神は）ご自分のみ子をわたしの内に啓示した」と語っている。（ガラテヤの信徒への手紙一章一六節）この場合「わたしの内に」という言葉は、パウロが顕現の出来事を体験した様子を理解する上でとても大切なことである。と同時に「啓示した」という彼の表現にも注意しなくてはならない。

×

×

「啓アポカリフイス示」という言葉は日常に使うことは少なく、聞くこともない。しかし、宗教一般の世界ではよく使われる言葉である。その意味は、神または超越的な存在が、自分自身の何であるかを自ら現すことである。つまり、人にとって決して知ることが出来ない神の秘儀が、神自身の方から一方的に現されることである。それだからこそ、そのような啓示の出来事に出会った者には、ただ超越的存在が現れたという驚きに止まらず、その出来事は神自身の世界の開示であり、交わりの迫りであることを圧倒的に知らしめられるのである。その瞬間に於いては、自我の働きによる「知」、つまり言葉による領解は無効となり、神自身による「知」、つまり神の支配（霊の働き）がその人を満たし、瞬時にして啓示を悟らしめるのである。これらの出来事をパウロは、神は「ご自分のみ子をわたしの内に啓示した」と言った。

したがって、「啓示」としての復活のキリストの顕現は、ただ、パウロの視覚や聴覚に具体的な姿形や音声として、客観的に見えたり聞こえたりしたという現象以上の出来事だったのである。ここのところは、くどいようだが、明確にしておかなければならない。つまり、十字架上で完全に息絶えたはずのイエスが、突然、生前の姿でパウロの前に現れ、語りかけた、ということに驚き、それ故に、彼がイエスを信じるようになったのであれば、パウロという人は、いささか軽薄すぎると言えよう。かつてイエスが、その弟子トマスに「あなたは見て信じた。見ないで信じる者は幸いである」と言われた言葉を思い出す必要がある。人は、昔も今も、ただ不思議な業だけに驚き、関心を抱き、業そのものの向こう側にある真理性を、自分の魂の深くで聞くことなく、不思議な現象だけに幻惑されその教えに従う。そのような愚かな状況は、今日ますます激しくなり、人々はより強い刺激的で己の肉体的な利益につながる不思議な業を求めて西に東に、宗教と称される集団や怪しき霊能者とされる教祖なる者を求めて走り回り騒ぎたてている。

パウロはキリストの顕現に於いて、神そのものの命を自分の内に満たされたのである。彼は、自分の靈魂の深奥に、神の命そのものを啓示されパウロの生の主体となったのである。それだからこそ「もはや、われ生きるに非ず、キリストわが内に生きる」と歓喜の告白をする。

彼は、その手紙の中で度々、キリストに「召された」とか「捕らえられた」とか語る。そして、先にも紹介したが「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と言う。それは、それまで彼を生かしていた自我が滅び、神の命であるキリストを生きる新しい自我に生かされる自分を自覚したということである。それは同時にパウロにとって異邦の民、人を生かしている命そのものとしてのキリストを伝える使徒として神に召された自覚でもあった。彼はガラテヤ人の信徒への手紙の冒頭で次のように語っている。

人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ。(ガラテヤの信徒への手紙一章一節)

×

×

復活のキリストの顕現は、パウロの内に、存在の根源を一挙に啓示した。「地と柄」の例えで言うならば、「柄」という見えるものばかりに目を向け、「柄」の如何を問うことに熱心であった彼の目を、「地」に向かわせたのである。パウロをして一挙に、この世の一切の事柄、それはユダヤ教やその他の宗教、またさまざまな哲学的な主義主張も含めたことからの根源にある構造の秘密に開眼させたのである。彼は、その命の^{たぎり}滾の事実を、復活のキリストそのものに於いて啓示され、その事実^に開眼し、その命に生きる者となったとき、次のように語った。

わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベンニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはパリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすようになったのです。そればかりか、わたしの主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。(フィリピの信徒への手紙三章五節以下)

×

×

復活のキリストの顕現に於いてパウロが内に受けた事は、彼がこの世で得て来た知恵を遙に越える神からの霊によるものであったという。

それはこの世の知恵ではなく、またこの世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。わたしたちが語るのは、「この世の知恵には」隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界が始まる前から定められておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。……「目が見もせず、耳が聞きもせず、

人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は自分を愛する者たちに準備された」と旧約聖書に書いてあるとおりで、わたしたちには、神が「靈」によってそのことを明らかに示してくださいました。

「靈」は一切のこと、神の深みさえも究めます。人の内にある靈以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の靈以外に神のことを知る者はいません。わたしたちは、世の靈ではなく、神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「靈」に教えられた言葉によつています。自然の人は神の靈に属することがらを受け入れません。その人にとつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈の人は、すべてのことの意味を識別することができますが、その人自身はだれも正しく識別することはできません。(コリントの信徒への手紙一 二章六節以下)

×

×

復活のキリストの顕現に於いてパウロは、一瞬にして自分を自分たらしめ、眞の主体が何かを、客観的な知としてでなく、直接に知ったのである。自分に起こったこの出来事を彼は「キリストと結ばれる」「新しい人を着る」と言い、さらに「キリストのなかに生きる」「キリストがわたしの中に生きている」と言語表現している。そして、それは彼の存在の主体であると信じて疑わ

なかつた「自我」の崩壊であつた。「だから、キリストと結ばれている人はだれでも、新しく創造された者なのです。古い自我が過ぎ去り、新しい神にある自己が生じた」と彼は歎喜する。
(コリントの信徒への手紙二 五章一七節)

×

×

彼は真の意味で「悔い改め」を体験した。神の御手が一瞬にして彼を悔い改めに導いた。この圧倒的な神の迫りに深い畏れおそを覚えたに違いない。それは超越なるものが肉体化される畏れである。そして、肉体化されたそれを言語化するために彼は、ダマスコの西方シリアの砂漠の荒涼の地に退いた。それは、「退修」たいしゅうを意味していた。時は紀元三三年、パウロ三十三歳頃である。

十 パウロの新生

アラビヤに退いたパウロが、そこで三年の間どのように過ごしていたのか、彼自身何も語っていない。しかし、神的な啓示体験をした者の多くがそうであるように、彼も啓示体験の内容を自覚的に受容し、それを肉体化する作業をしていたのだと思う。まさに彼は「退修」していたのである。

×

×

それにしても、人は生活の中で「退修」の時を持つことは大切である。時代の風潮や世間の常識に流され、教えられた教義に盲従し、この世の論理に振り回され、人間自我が生み出す主義主張に埋没するなど、自分自身を見失っている場合が多くある。そのような生活の中で「退修」の時をもつことは、自分の深奥の声に耳を傾け、自分の生き方、在り方の歪みに気づかせ、真実の自己を取り戻させてくれる。ましてや、神的な啓示に接した者に於ける「退修」は、その者の生き方に決定的且つ明確な悔い改めと方向づけを与えることになる。さらに、霊的な迫りはその者を召命感で満たし、この世に向かって神の言葉を語り、神の使徒へと駆り立てる。事実、彼は次のように語る。

わたしは福音を宣べ伝えても、それは誇りにはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。もし福音のを宣べ伝えなければ、わたしはわざわいなのだ。(コリントの信徒への手紙一 九章一六節)

×

×

はたして、パウロはアラビヤに於ける退修を経てどのようなようになったのか。彼はキリストに在って新生した。それまで益であり価値あると思っていた一切のことが、キリストを知ることの絶大さのゆえに無価値になってしまふほどに新生した。律法の文字に於いて知っていた「文字の神」

ではなく、命滾る「生きる神」の啓示により、刻刻今今の創造者、保持者、完成者そのものである熱き神が自己の主体であることを知ったのである。だから彼は歎喜して言う。

（自分の知識や経験や願望や文字などの）肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。だから、キリストと結ばれる（一つとされる）人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去った。見よ、新しいものが生じた。

キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では、他の一切を損失とみなしています。キリストのゆえにわたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。（フィリピの信徒への手紙三章八節） （コリントの信徒への手紙二 五章一六節）

×

×

彼は先ず、徹底的に否定し迫害していたイエスの弟子たちが伝える「キリスト宣教」を受入れた。最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファ（ペテロ）に現れその後十二人に現れたことです。（コリントの信徒への手紙二 一五章三節）

パウロが受け入れた最も大切な教えは、イエスは「わたしたちの罪のために死」んだこと、イ

エスは「三日目に復活した」こと、の二つであった。しかも、これら二つのことは「旧約聖書に預言して書かれていたこと」だといふのである。

×

×

では、イエスは「わたしたちの罪のために死んだ」というその内容はどういふことなのか。

ここで「わたしたち」といふのは、ユダヤ民族のことである。また「罪」とは、旧約聖書に於いては、神がイスラエルの民に契約として与えた律法（これがキリスト教の側からは旧約と言ひ、それを記してあるのが旧約聖書）に従わないこと。つまり、神との契約又は、神の御意みこころをあらわす神の言葉としての律法に対する不従順の「罪」である。したがって、この場合の「罪」とは、今日の私たちが言うところの、「悪いことをした」といふ罪ではなく、神がユダヤの民と交わした契約に違反した、神に対する「罪」のことである。その意味で、旧約聖書（ユダヤ教）に於ける罪概念は律法的概念であることを、ここで確認しておきたい。

×

×

律法違反は罪であり、それには必ず罰がともなう。だからこそ、旧約聖書の預言者は、国家的なさまざまな困難とそれに伴うイスラエルの民の悲惨は、神の律法に対する不従順の罪の結果としての神の怒りと理解し、自らを民に対する神の思いと化し律法への従順を告げた。それゆえにイスラエルの預言者は、未来のことをあらかじ予め語る予言者ではなく、神の思いを預あずかって、（その

ままに語る預言者なのである。これら預言者については先に少し述べたとおりである。)

X

X

このような預言者は、民の律法違反の罪をただ弾劾するだけでなく、一方において、何故^{なぜ}神の民である者が苦しみ、神無き異邦の国が富み栄え、神の民を苦しませるのかという問いを彼らは苦悩の内に、神に対して問いつづけていた。

それに対する神の答えとして生じてきたのが、神の民はやがて、すべての強国から開放され、世界の民の上に支配を委^たねられる時が来るといふ、ユダヤ的な終末論の発生である。そして、それを現実にもたらすために神から遣わされる者が、救済者として到来するという^{期待}が生まれ、預言者はそれを語り、ユダヤの民の間にこの終末論的救済者到来の^{期待}信仰が広まっていた。この救済者はメシヤとよばれ、ギリシヤ語に訳された言葉がキリストスであり、私たちはそれを「キリスト（救い主）」と称している。このように「キリスト」とは、名前としての固有名詞ではなく働きをあらわす言葉なのである。したがって、「イエス・キリスト」とは「イエス様は、^{期待}して来た来るべき救済者^{キリスト}であります」という信仰告白を含んだ呼び名なのである。

X

X

旧約聖書に於ける終末論的救済者到来の^{期待}信仰には、二つの流れがあることを研究者は明らかにしている。その一つは政治的な救済者であり、他の一つは宗教的な救済者である。

いずれにしても、このような救済者キリストは偉大なる王ダビデの子孫から出、聖なる民を集めイスラエル国（「神は支配したもう国」という意味）を回復するという期待が旧約聖書にあり、イエスの時代にもその期待は民の内にさまざまな形であったといわれている。そして、イエスの弟子たちは、「イエスコそ待望していたキリスト（救済者）である」と信じたのであり、当時のユダヤ教に於ける救済者待望の宗教的状况から見て、それは一つの信仰の立場であったといえる。勿論弟子たちのそれは、政治的な救済者としてでなく、人の罪を贖あがなう宗教的な救済者、つまり、「聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだ」救い主としてイエスを信じ受け入れたのである。

×

×

とにかく、パウロはイエスの弟子達の伝える「キリスト宣教」を受け入れ、アラビヤでの三年の退修後、エルサレムに上り教団の指導者であるペテロとイエスの弟ヤコブとに会い、そこに十五日の間滞在した。その後、彼はシリヤおよびギリキヤ地方に出かけて行ったが、なぜかエルサレムでは他の使徒たちの誰にも会っていない。（ガラテヤの信徒への手紙一章一八節以下）ここには、キリスト教徒迫害の先頭に立っていたパウロとエルサレムの使徒達との使徒職をめぐっての確執があったのではないかと思われる。事実彼は、他の使徒たちのように生前のイエスから直接に任命されたのではない。またエルサレルの教団から使徒として派遣されたのではない。いわ

ば、彼はキリスト教徒迫害者から一転してひとり勝手に、キリストの宣教を始めた者なのである。だからこそ、「人々からでもなく、人をおしてでもなく、イエス・キリストを死者の中から復活させた父である神とによつて使徒とされたパウロ」と、自らのキリストを宣教する使徒としての根柢を、ハッキリと示さなければならなかつたのである。（ガラテヤの信徒への手紙一章一節以下）しかし、そのようなパウロであつたからこそ、彼は真実の信仰人であり得たのである。

×

×

人は、自分が依つて立つところのものを、観念的または原理主義的に理解してしまふことがある。ここで言う観念的とは、頭の中で組み立て、それを固定的に考えてしまふことであり、原理主義的とは、ひとつの法則を絶対とし、それに基づいてすべてのことを認識することで事足れりとする態度であるが、そのような人は、大抵の場合、教条主義者または合理主義者であり、利己的であり、加えて独善的且つ排他的でもある。そしてときとして熱狂的である場合がある。

このような人はさまざまな分野におり、もっとも厄介な人間となつていふように思う。それを生み出してくる大きな要因の一つは、「考える事をしない」ということである。勿論、彼らなりに大いに考えるのだが、その考え方が偏向しているので、自分勝手な考え、つまり独善的になる。現実に秘められているさまざまな要因や側面があることを無視して、一つの原理を絶対的なものとして、その枠内で現実を観念で合理的に切り刻んで、一件落着とする。その態度は観念的であ